

国立教育政策研究所が生徒指導リーフで指摘 「中1ギャップ」を安易に用いるな

「小中一貫教育」を学校に押しつけようとする人達がよく使用する「中1ギャップ」という語に対して、文部科学省国立教育政策研究所が生徒指導リーフ「中1ギャップの真実」の中で安易に使用することを戒めています。

「中1ギャップ」という語に明確な定義はなく、その前提となつていいる事実認識(いじめ・不登校の急増)も客観的事実とは言い切れない。

「中1ギャップ」に限らず、便利な用語を安易に用いることで思考を停止し、根拠を確認しないままの議論を進めたり広めたりしてはならない。

この後

「いじめは、中1で急増するのかわか？」
「児童生徒のいじめ経験率は、小学生の方が高い」
「不登校は、中1で急増するのかわか？」
「小6から中1への増加率は1.3倍前後？」

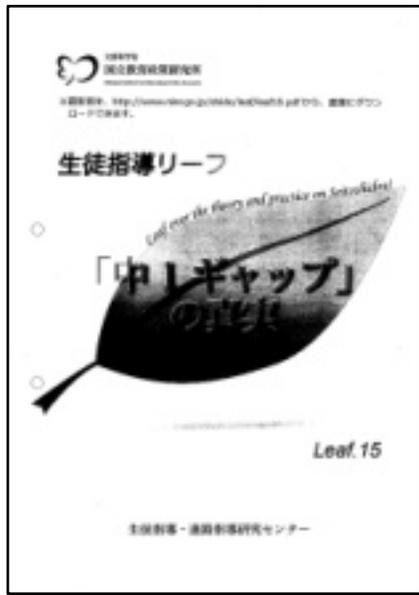
「出前授業」を行い、中学校の先生は怖くないことを知らしめて不安感を取り除くことで、不登校は減らせる。」「中1ギャップ」から派生した議論で、そんな話が広まりました。しかし、この話は科学的に裏付けられたものではありません。

かわらず中学校1年生時には不登校になった生徒(新規不登校群)と、「小学校時代には欠席が目立たず中学校1年生時にも不登校になっていない生徒(登校群)」の度数分布の平均値を求めて単純に比較すると、新規不登校群の方がわずかに不安感が高いことが分かります。
しかしながら、分布をよく見ると、最も不安感の高かった生徒は誰一人新規不登校群になっていません。しかも、続く生徒でも、新規不登校群になつたのは1名ずつです。反対に、不安感が低い方にも同じくらい新規不登校群になつた生徒はいま

「中1ギャップ」という用語の問題点

「中1ギャップ」の語は、いわゆる「問題行動等調査」の結果を学年別に見ると、小6から中1でいじめや不登校の数が急増するよう見えることから使われ始め、今では小中学校間の接続の問題全般に「便利に」用いられています。

しかし、いじめが中1で急増するという当初の認識が正しいのか、不登校の中1での増加にしても「ギャップ」と呼ぶほどの変化なのかについては、慎重であるべきです。なぜなら、必ずしも実態を表現しているとは言い切れないからです。とりわけ、その語感から、中1になる段階で突然何か起きるかのようなイメージや、学校制度の違いという外的要因が種々の問題の主原因であるかのようなイメージを抱くと、問題の本質や所在を見誤り、間違った対応をしかねません。



突然何か起きるかのようなイメージや、学校制度の違いという外的要因が種々の問題の主原因であるかのようなイメージを抱くと、問題の本質や所在を見誤り、間違った対応をしかねません。

便利な用語を用いることで、目の前で起きている問題を理解した気になってはなりません。実際に何が起きているのかを冷静に捉えることから始めましょう。(リーフより)

「中学校で顕在化する問題も、実は小学校から」「小学校からの連続性に着目すること、中学校の問題を解消する」という内容が、具体的なデータを示して述べられます。

そして最後に、出前授業や小中連携についてワンプointアドバイス。

「中学進学に対する小学生的不安感が中学進学後の不登校の原因なのだから、中学校教師が小学

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターでは、A県の協力を得て、県内全ての小6を対象に、中学進学に伴う期待感と不安感に関するアンケート調査を平成22年2月に行った上で、平成22年3月(小6)時点までの出欠席状況と平成23年3月(中1)時点までの出欠席状況を調べ、不安感が原因で不登校になつたという事実が確認できるかどうか検証しました。

「小学校時代には欠席が目立たなかったにもかかわらず中学校1年生時には不登校になった生徒(新規不登校群)」と、「小学校時代には欠席が目立たず中学校1年生時にも不登校になっていない生徒(登校群)」の度数分布の平均値を求めて単純に比較すると、新規不登校群の方がわずかに不安感が高いことが分かります。
しかしながら、分布をよく見ると、最も不安感の高かった生徒は誰一人新規不登校群になっていません。しかも、続く生徒でも、新規不登校群になつたのは1名ずつです。反対に、不安感が低い方にも同じくらい新規不登校群になつた生徒はいま

「集団的自衛権」の行使反対。教え子を再び戦場に送るな。